Ⅳ-71　都市内幹線街路の景観評価とその要因について

大阪産業大学工学部　正員　榊原和彦
阪急電鉄(株)　正員　金崎滋喜
兵庫県　正員　阪西郎

1 はじめに

大阪市内御堂筋は，市の中心部を南北に通る幹線街路である。中員約25mで，北行一方通行の5車線と，中員3m程度の歩道を両側に有する。沿道は，オフィス街，問屋・商店街などとして混合的に利用されている。場所により程度の相違はあるが，オフィスビルと中小の商店が混在し，雑多な印象を与える。大阪市内ではよく見受けられる，景観的にも問題の多い典型的な幹線街路であると言える。この街路の景観的な問題を見出し，修景への指針を得るために，種々の調査を行なった。本論では，モンタージュ写真を用いた，一対比較法，アンケートによる調査の結果について述べる。というのは，実証的に分析された結論ではなく，景観の評価構造に関する仮説を提示することを意図したものである。

2 調査の内容

モンタージュ写真による調査は，歩行者の立場における静止的景観を前提として，重要と思われる景観構成要素が評価に及ぼす影響を探ることを主目的に行なったものである。調査に用いたモンタージュ写真（対象と呼ぶ）は，図－1に示すように構成したもので，基本となる背景を3種類〔①歩道端の建物がオフィスビル，②連続的な店を有する商店，③喫茶店〕とり，比較的容易に操作できる3種類の構成要素〔①街路樹，②看板，電柱，標識など（看板類と総称する），③歩道〕を適宜変化させたものである。対象は表－1に示すように，6群に分かれる。特定の要素の景観的影響を探ること，要素間相互の相対的影響を見ること，など調査目的に応じて，分割して取り扱ったものである。

3 調査の方法

対象をカラースライドに撮影し，室内で映写して以下の調査を行なった。

a) 一対比較調査：対象群Ⅰ～Ⅴについては，簡便法[1),2)]を用い景観として良いかという項目について行なった。対象群Ⅵについては，①開放感　②親近感　③調和・総一感　④総合評価，の各項目について完全な一対比較を行なった。

b) アンケート調査：対象群Ⅰ，Ⅱ，Ⅲを用い，街路樹，看板類に関する評定尺度によるアンケート調査を行なった。項目は，街路樹に関しては，①量　②高さ　③・色・形・④位置・範囲　⑤間隔　密度，看板類については，①量　②色・形　③配置・組合せ　④目立ちやすさ，であり適当か不適当かを5段階で答えてもらった。分析は，Thurston の方法，数量化Ⅰ類，系列カテゴリー法，等によった。分析結果の一部は参考文献2)にある。

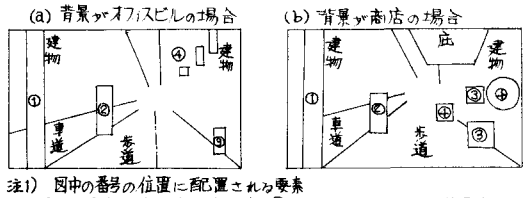
4 結果の考察

a) 項目別にみた評価について

表－1　対象群の特徴と調査方法

対象群	背景	変化させた要素	調査に用いた対象数	一対比較回数	アンケート	被験者合計
Ⅰ	オフィスビル	プラタナス，ヤナギ，イチョウの高さ，間隔等を変えたもの	9種	21	実施	66
Ⅱ	オフィスビル	看板類	15	39	実施	37
Ⅲ	商店	看板類	12	30	実施	61
Ⅳ	オフィスビル	街路樹(2種類と現状のまま) 看板類，歩道切見(現状と1m拡巾)	14	44		78
Ⅴ	商店	〃 〃	15	42		103
Ⅵ	オフィスビル 商店 喫茶店	〃 〃	9	36×4 (評価項目数)		37

図－1　モンタージュ写真の構成



注1) 図中の番号の位置に配置される要素
① 交通標識or美化柱or普通柱　② 地名標示板とタクシー乗場標識or広告塔(但し，①が普通柱の場合：この位置にも普通柱を配置。)　③看板　④看板
注2) 各位置に要素が配置されないものもある。
注3) 街路樹は歩道の車道側の端に配置した。
注4) 背景が喫茶店の場合は，i)現状と，ii)普通柱(①の位置)と広告塔(②の位置)が配置されたもの，の2種類である。

i)開放感について：構図の仕組みが各対象間でさほど変わらないので，看板類の量によって規定される。特に電柱，上空に向って伸びる看板，連続的な底が開放感を減ずる。緑は，視野を遮るものではあるが影響は少ない。地表面の拡がりも，上空への拡がりに方らず重要であって，自動車の影響が大きい。

ii)親近感について：構成要素の色彩の華やかさや形態の豊かさ（特に建物の），街路樹の量に関係するがそれは，要素個々の直接の影響というより，全体からかもし出される雰囲気（暖かさ，豊かさなど）や表情によるといえよう。統一体としての景観の相貌性[3]を問題にし，親近感との関連を探る要がある。

iii)調和・統一感について：斉整な背景と街路樹が評価を高め，看板類，自動車が悪影響を及ぼす。これ一要素の影響は比較的明確である。

iv)総合評価とそれの他項目との関連について：調和・統一感との類似性が高く，似通った評価がなされている。両者の評価に相違が生ずるのは主として親近感に依る。この種の景観では，空間的斉整さの上に，親近さを感じることのできる何かが必要なのであろう。親近感の評価項目としての重要性を思わせる。開放感との関連はあまりみられないが，開放性の評価が不要ということではない。

b)構成要素（街路施設）について

i)街路樹について：評価（景観の良さ）に及ぼす影響は最も大きい。適当な量で連続性のあるものがよい。緑の量の適当さの判断は必らずしも面積の大小にはよらないが，少ないものは良くない。'高さ'は，繁りの下部迄の高さによって判断されると思われ，視野を完全に遮ぎる程低くても，高過ぎてもよくない。'形'は丸みを帯びた柔かみが感じられるもの，'色'は枯れを感じさせないものが好まれる。'位置・範囲'は，歩道を狭くしないものが良い。'間隔・密度'は，量と同じく適度なものがよく，あまりに密または疎のものはよくない。上記の要因のうち影響が大きいのは，'色・形''量'である。

ii)看板類について：まず，評価の特徴を述べる。オフィス街，商店街を問わず，看板類の量は少ない方が景観としての評価は高い。しかし，下記かうもうかがえるように，商店街において，もし，看板の適切な配置がなされているとすれば，この限りではない。同じ位置にある①交通標識，②美化柱（スリムな形態と落ち着いた色彩の電柱）③普通電柱，を比べると，上記の順に評価が良い。標識類は，特に複数が連続して重なって見えるものは良くなく，大きくても，単体の方がよい。

次に個別項目ごとに述べる。'量'は，オフィス街においては少ない程好まれるが，商店街ではそうではなく，特に看板は，無いものでなければ適当に存在する方がよい。'色・形'では普通柱を含むものは評価されず，明るい，暖かな色の看板が適度にあるものが良い。'配置・組合わせ'は，歩道の両側に適切な量が配置されているものがよく，片側に片寄って配置されているものの評価は良くない。'目立ちやすさ'は，量にはとゝ程影響せず色彩と関わりがある。評価に最も影響するのは'配置・組合わせ'で，'目立ちやすさ'は，ほとんど関わりない。

iii)歩道について：この街路での歩道中員の1m程度の拡巾では，とゝ程広くなったとは感じられない。したがって景観的影響は少ないが，広いほうがよいことは確かである。この調査では拡巾は，視点の右側（沿道側）に行なったので，商店街を背景にしたものでは，商店の庇の位置が変わり，拡巾前には頭上にかぶさっていたものが，拡巾後にはそうではなくなって庇上の壁面と看板が見えるようになった。雰囲気がすっかり変わり，視点の微少な移動の影響の大きさを思わせた。この調査では庇のかぶさった方が好まれたようだが，庇の有無による開放感はこの場合さほど変わらないので，庇上の看板が見えることの影響のようである。したがって庇，ひいてはアーケードの是非はわからない。

iv)構成要素（街路施設）の相対的影響について：評価に最も影響するのは，街路樹，植栽であるが，オフィス街に比して看板の多い商店街では，同等かそれ以上に看板類の影響がある。歩道中員自体はとゝ程影響しない。

5 おわりに

以上調査結果を概説的に述べた。モンタージュ写真，詳しい分析等については講演時に示す。

参考文献 1)神原・金崎・阪西：街路施設が景観に与える影響に関する研究，昭和53年度関西支部研究学術講演会概要 2)天野・神原・金崎：街路景観の評価手法に関する研究，同上 3)谷口・岡崎：空間の相貌性，日本建築学会昭和49年度大会学術講演梗概集